

2015年:73-85.

厚生労働省,2019,「外国人介護職員の雇用に関する介護事業者向けガイドブック(日本語版)」,厚生労働省ホームページ,(2024年7月21日取得,https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_28131.html).

厚生労働省,2024,「第9期介護保険事業計画に基づく介護職員の必要数について」,厚生労働省ホームページ,(2024年7月24日取得,https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_41379.html).

厚生労働省,2024,「介護分野における特定技能協議会運営委員会(令和5年度第1回)資料2」,厚生労働省ホームページ,(2024年7月21日取得,https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_000117702_00013.html).

厚生労働省老健局,2023,「介護人材の処遇改善等(介護人材の確保と介護現場の生産性の向上)資料1 社会保障審議会介護給付費分科会(第223回)」,厚生労働省ホームページ,(2024年7月21日取得,https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_35028.html).

厚生労働省老健局,2023,「介護分野の最近の動向について 資料1 社保審-介護給付費分科会(第217回)」,厚生労働省ホームページ,(2024年7月22日取得,https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_33174.html).

国立社会保障・人口問題研究所,2023,「人口統計資料集2024」(2024年11月1日取得,<https://www.ipss.go.jp/syoushika/bunken/data/pdf/jinkokenshiryo348.pdf>).

李泰俊,加瀬裕子,2020,「高齢者介護施設における外国人介護職の異文化適応過程-複線径路・等至性モデル(TEM)による分析-」『介護福祉学』,第27巻第1号:1-10.

永吉希久子,田中宏,鈴木健,2021,「日本の移民統合-全国調査から見る現況と障壁」,明石書店.

内閣府,2023,「令和5年版高齢社会白書(全体版)」,内閣府ホームページ,(2024年7月7日取得,https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2023/zenbun/05pdf_index.html).

go.jp/kourei/whitepaper/w-2023/zenbun/05pdf_index.html).

奈良玲子,2020,「外国人介護士のキャリア志向についての一考察-職業としての介護士を目指すプロセスについて」『日本比較文化学会』第140号,2020年7月:267-278.

大関由貴ほか,2014,「外国人介護人材に関する日本語教育研究の現状と課題-経済連携協定による来日者を対象とした研究を中心に-」『国際経営フォーラム』,Vol. 25,2014年:239-280.

大竹恵子,2013,「介護労働者の早期離職に関わる要因:リァリティ・ショックの視点から」『同志社政策科学研究』15(1),2013年:51-162

総務省統計局,2023,「人口推計」,総務省統計局ホームページ,(2024年11月1日取得,<https://www.stat.go.jp/data/jinsui/2023np/index.html>).

出入国在留管理庁,2024,特定技能在留外国人数の公表等,出入国在留管理庁ホームページ,(2024年7月21日取得,https://www.moj.go.jp/isa/applications/ssw/nyuukokukanri07_00215.html).

出入国在留管理庁,2024,在留外国人統計(旧登録外国人統計)統計表,出入国在留管理庁ホームページ,(2024年7月21日取得,https://www.moj.go.jp/isa/policies/statistics/toukei_ichiran_touroku.html).

出入国在留管理庁,2024,「技能実習制度及び特定技能制度の在り方に関する有識者会議(第9回)資料2-4論点4関連」出入国在留管理庁ホームページ,(2024年11月1日取得,https://www.moj.go.jp/isa/policies/conference/03_00071.html).

上野美香,2013,「介護施設におけるインドネシア人候補者の日本語をめぐる諸問題——日本人介護職員の視点からの分析と課題提起——」『日本語教育』,2013年156巻:1-15.

投稿
論文

ホームヘルパーの活動特性に関する研究 —映像振り返りを用いた微視的相互行為の分析を通して—

八木 裕子 東洋大学 福祉社会デザイン学部

キーワード

ホームヘルパー、相互行為、ジェスチャー、オノマトペ

I はじめに

1. ヘルパー研究の現状

今日の日本における高齢者に対する政策として、介護が必要になっても、住み慣れた地域や住まいで尊厳ある自立した生活を送ることができるよう、在宅福祉や地域福祉に重点が置かれている。そこで重要となるサービスは「訪問介護」である。訪問介護は、介護保険制度上の居宅サービスで、訪問介護員が自宅を訪問し、食事、排泄、入浴などの介護や家事などの日常生活の支援を行い、在宅生活を支えていくサービスである。このサービスは介護保険法制定以前、「ホームヘルプサービス」として長年日本の在宅介護を支えてきた歴史がある。そのため、現在でも介護現場や利用者の間では「ホームヘルパー」や「ホームヘルプ」という名称が広く使用されている。本稿では訪問介護に携わる介護職員を「ホームヘルパー（ヘルパー）」、サービス名を「ホームヘルプサービス」と呼ぶこととする。

ホームヘルパーは、利用者一人ひとりだけでなく、家族や家庭それぞれの個別な価値観を的確に捉え、その価値観に合わせた支援を行うことで、利用者や家族の生活的価値の向上に柔軟に関与する対人援助の専門職である。このように多様なヘルパーの活動の特徴を捉えるためには、どのような分析を行うべきかが重要な課題となる。

従来のヘルパーに関する研究については、松本(2017:47-59)¹⁾がまとめているが、多くはヘルパー本人へのアンケート調査や聞き取り調査に基づいている。ホームヘルプサービスは利用者宅で行われるため、密室性が特徴であり、ほとんどの場合、ヘルパーと利用者以外の第三者がサービス提供時に立ち会うことはない。そのため、他のヘルパーが具体的にどのような支援を行ったかを知るには、ヘルパーが残す記録や、アンケートやインタビューによる情報に頼るしかないのが現状である。

筆者が新人ヘルパーであった頃には、10年以上の経験を持つベテランヘルパーが多く存在していた。当時、ベテランヘルパーがケアに入った翌

日に、同じ利用者を訪問すると、利用者の様子が明らかに良い方向へ変化していることがあった。その際、ベテランヘルパーに、具体的にどのような関わり方をしたのかを尋ねても、「特別なことはしていない」という返答がなされることがしばしばあった。

ホームヘルプ援助の固有性として、須加²⁾は、「ホームヘルパーは、利用者の家庭に入り家事・介護を行なうことで、他の職種では知ることのできない家庭の生活実態や生活上の心身機能を把握し、それをアセスメントに活用できる」(須加1999:41)と述べている。具体的には、利用者のために食事をつくる際、冷蔵庫内の古くなった食品に気づいたり、掃除を通じてトイレでの失敗や失禁の状況を把握できるといった点である。しかしこのような気づきは、日常的な行為として捉えられることが多く、ホームヘルパーが行う独自のアセスメントとして特別視されることは少ない。ヘルパー自身も「特別なことはやっていない」と表現することがある。

現在の介護福祉士養成では「介護過程」の学習が必須となり、アセスメントスキルが向上しつつある。一方で、筆者が当時関わったベテランヘルパーたちは、措置時代のホームヘルプサービスを長年支えてきた経験豊かな存在であり、「介護過程」という言葉がまだ一般的でなかった時代に活動していた。そのため、アセスメントの言語化や支援内容の可視化はそこまで求められておらず、当時のホームヘルプにおける介護スキルの伝承は主に口伝で行われ、現場でのノウハウや実践知は勘や経験的に依存してきた。

またホームヘルプサービスは在宅で行われるため、初回の数回の同行訪問を除けば、他者がヘルパーの活動を直接学ぶ機会は非常に限られてきた。このような密室性の中で行われるきめ細かな支援は、ヘルパー自身の判断と工夫に委ねられる場面が多く、その独自性や支援の特徴を明確に言語化することが困難であった。

さらに認知症を抱える利用者の場合、日常生活の行為において、さまざまな出来事に対して注意を分散させることに困難を抱えている³⁾。このよ

うな状況下で、ヘルパーの活動は、利用者の注意をどのようにナビゲートするかが重要な課題となる。しかし、こうした活動の詳細はヘルパー自身にとっても振り返って言語化することが難しい場合がある。

2. 研究の目的

介護は、介護の支援方法に基づいて成り立つ独自の支援関係があり、これを「介護関係」と呼ぶ。介護は、この介護関係を通じてケアを行う活動である。つまり、ケアは、支援を求める側（受け手）と応ずる側（与え手）が、特定の行為（言語的・非言語的）を意図的に交換する介護関係によって成立する。介護関係を通して行われるケアは、介護の目的や目標を持って展開されるものである。

介護関係には、「介護による支援を求める利用者」と「介護に応ずる他者」、そして相互の主体的行為を意図的に交換して相補的に学び合う「協働の場」の3つの要素がある。この「協働の場」では、「利用者の生活の場の中で起きている様々な諸行為における不自由さを見出し、より良い方法があるかどうかを確かめ合いつつ、最も『気持ちのよい』水準のケアの方法を継続的に追求していく過程を持っている」と中島⁴⁾（中島 2003:35）は述べている。

またこの「協働の場」に関して、齋藤⁵⁾は、「ホームヘルパーと利用者の両者におかれるコンテキストに十分に配慮しながら、ケアの関係（介護関係）を固定的でないダイナミズムとしてとらえていくことが必要である」（齋藤 2015:18）と述べている。

そこで、本研究では、介護関係を通して展開されるホームヘルプサービスのケア、すなわち、ホームヘルプサービスにおける利用者とヘルパーの相互行為（インタラクション）に着目する。これまで、ホームヘルプサービスが行われる密室性の高い空間においては、第三者がその現場に長時間立ち入ることが難しいと指摘されてきた。しかし、今回はこの研究の限界を乗り越え、ホームヘルプサービスにおける利用者とヘルパーの活動を映像に収め、その映像をヘルパーと共に振り返る方法を採用した。

この方法により、映像を用いることで、活動中の微細な動作を記述することが可能である一方、ヘルパー自身もその微細な記述を手がかりに、従来の言語による振り返りとは異なる表現で、自分の動作の際に何が起こったか言語化できる。また、研究者はヘルパーの振り返りを通して、映像だけでは見落とされがちな現場の手がかりを把握し、ヘルパーの行動がどのような経験に由来するものかを確認することができる。

この方法を用いることで、研究者が一方的にホームヘルパーの行動を言語化するのではなく、ヘルパーと共に介護の複雑な活動を描写することが可能となる。本研究の目的は、この分析を通して、ケアの現場からホームヘルパーの支援活動の特性を明らかにすることである。

Ⅱ | 研究方法

1. 対象

協力者は、訪問介護事業所にそれぞれ所属するホームヘルパーのX氏・Y氏・Z氏および利用者A・Bである（表1）。

X氏（女性）は、ヘルパー歴30年で介護福祉士の国家資格を有している。Y氏（女性）は、ヘルパー歴5年半である。Z氏（男性）は、ヘルパー歴30年で介護福祉士の国家資格を有しており、訪問介護事業所の管理者兼サービス提供責任者を兼務している。

利用者Aは85歳・要介護1の女性で、認知症を患っており、週4日のホームヘルプサービスを利用している。利用者Bは、78歳・要介護3の男性で、多発性脳梗塞による構音障害があり、週5日のホームヘルプサービスを利用している。

2. 調査方法

利用者とヘルパーの両者に了解を得て、双方の

表1 対象のヘルパーと利用者

事業所	ホームヘルパー	利用者
①	X氏（介護福祉士）・Y氏	A
②	Z氏（介護福祉士）	B

行為を周囲の環境も含めて、同期的に二方の定点から録画と録音で記録した。録画には、DJI Pocket 2を使用し、利用者の暮らしを妨げにくい小型のカメラを用いた。

X氏は、ホームヘルプサービスの活動場面のうち、1時間の「共に行なう調理」の場面を計4回、Y氏は1回、延べ5時間にわたって撮影した。

Z氏は、1時間の生活援助の「買い物、調理、掃除」の場面を計2回、延べ2時間撮影した。

3. 調査実施期間

事業所①(ヘルパーX・Yが所属)については、2022年5月～6月に実施し、事業所②(ヘルパーZが所属)については、2022年10月に行なった。

4. 分析方法

撮影した映像から動画ファイルと音声ファイルを作成し、映像分析ソフトウェアELAN(EUDICO Linguistic Annotator)を使用して、音声および身体動作のコーディングを行った。ELANは、1フレームごとの分析が可能なソフト

で、マックス・プランク研究所が開発した。多様なOSで利用可能で、無料で提供されている。このソフトを使用することで、音声や動画を繰り返し再生しつつ、ミリ秒単位の幅で注釈(メモ)や逐語記録を追加することが可能である。

注釈をつけた箇所の開始・終了時間は自動的に記録され、音声注釈では音声波形も表示されるため、波形を確認しながら正確に注釈を記録することができる。さらに同じ場面に対して、複数の注釈層を設定し、さまざまな視点からの分析が可能である。この機能により、行動ごとに時間を記録したり、注釈を書き写したり、集計することが可能な映像アノテーション(注釈)支援ツールである⁶⁾(写真1)。ELANを使用することで、撮影した動画を連続した写真のように扱うことができ、音声についても、会話分析が可能となるため、より詳細な解釈が行える。なお、現在のバージョンは6.6である。

高木ら⁷⁾の研究によると、会話分析は単なるケーススタディと見なされがちであるが、他の研究方法と比較しても信頼性、妥当性、客観性が高いと



写真1 ELANの操作画面

されている。またELANは1/60秒単位で動作を細かく分けることができ、利用者とヘルパーの微細なやり取りを発見するために非常に有効なツールである。さらに対象場면을何度も繰り返し検証することで、利用者とヘルパーの感情や情動の変化をより詳細に分析することが可能である。そのため、本研究では、音声と映像データを組み合わせたマルチモーダルコミュニケーションデータを定量的に分析するためにELANを使用した。

分析については、人間行動学の専門家であり、ELAN普及の立役者である研究者からスーパーバイズを受けて行った。その後、相互行為分析の対象として重要な場面を選定し、当事者であるX氏・Z氏および訪問介護事業所の管理者を交えてデータセッションを実施した。その記録をもとに、分析を再度記述した。

5. 倫理的留意

本研究を進めるにあたっては、研究対象である利用者と家族介護者、ホームヘルパー、ならびにホームヘルパーが所属している訪問介護事業所に対して、本研究の目的、調査内容、研究方法（録画、録音の説明も含む）

および研究結果を公表する場合には個人情報情報が匿名処理される旨を口頭と紙面をもって説明した。その上で、各対象から同意書に署名を得た。なお、本研究は東洋大学ライフデザイン学部研究等倫理委員会の許可を得て実施した（承認番号：L2022-003S）。

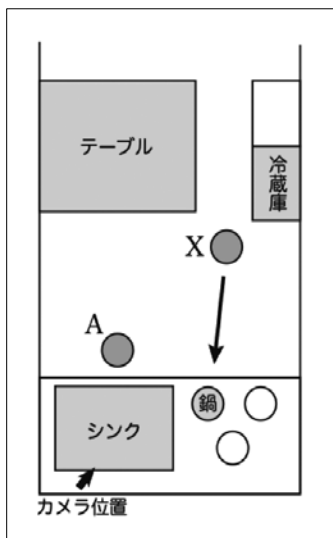


図1 事例①②③でのダイニングキッチンの見取り図

Ⅲ 結果と考察

1. 指さしを含むジェスチャー連鎖が利用者とヘルパーの共同注意を達成させる

●事例①「あともう1品」

01 X：あと、もう1品できちゃってんだけど、
どうする？

02 (1.6)

03 X：卵とじ？

04 A：うん、そうね

05 X：いい？

（下線部分は、数字の「1」から指さしに変換している箇所）

事例①「あともう1品」は、夕食づくりの家事支援の場面である。ヘルパーXはダイニングキッチンで、認知症の利用者Aと一緒に夕食を準備している（図1）。Aはシンクの前で布巾を絞りながら、布巾に視線を落としている。一方、Xは01行目以降、冷蔵庫の前からコンロの上にある鍋の方向へと移動した。以下、事例①の非言語行



図2 事例①の1行目「もう一品」でのXとAのやりとり



図3 事例①の1行目「『でき』ちゃってんだけど」でのXとAのやりとり

動を検討する。

01行目におけるXの発話の冒頭「あと」の時点では、Aは手元の布巾に視線を落としていた。しかし、直後の「もう1品」という発話のタイミングで、Aは布巾からXへと視線を移動させている。この「1」という言葉のタイミングで、Xは人差し指を立てる身振りを示している(図2)。次に、Xはその人差し指の形状を保ったまま、「できちゃってんだけどどうする?」の「でき」で指をコンロの上にある鍋へと向け(図3)、さらに「できちゃってんだけどどうする?」の発話中に鍋へ向かって歩き始める。このとき、Aの視線は、Xの動きに追従し、Xが到達した鍋を見る。これにより、XとAとは鍋を対象とする共同注意を達成する。さらに、鍋の前に到達したXは、02行目の1.6秒の間に鍋へ視線を移し、箸で中身をかき混ぜる。

ここで注目すべき点は、Xが最初から鍋を指すのではなく、まず「1」を表す身振りを示し、指自体にAの注意を喚起した後、その形状を保ったまま鍋を指さす指へと「転用」された点である。指さしは同時に行われる発話、とりわけ直示表現と相まって、共同注意を達成することが知られている⁸⁾。

この事例では、人差し指を立て、指自体への注意を喚起した後に、指さしと身体の移動を同時に行うことで、共同注意が達成されている。この例から、同時に発せられる発話とジェスチャーの組み合わせに加え、指さしに先行するジェスチャーとその後の指さしの連鎖も、共同注意の達成に関与していることがわかる。

しかし、一度は達成された鍋への共同注意は、すぐに解消されてしまう。Aは、02行目の1.6秒の沈黙の間に、鍋から再び手元の布巾へと視線を戻した。Xの01行目での問いかけに対して、Aはしばらく発話による反応を示していない。

Xは、03行目で「卵とじ?」と具体的な提案を含む再質問を行い、鍋からAに視線を移した。この質問に対し、Aはすぐに04行目で「うん、そうね」と発話し、うなずいて布巾から鍋に視線を再び移動する。この時点で、Aの鍋への注意が再び促され、XはAが鍋を見ていることを視線で確認した。

さらに05行目で、Xが「いい?」と確認すると、Aは鍋に視線を維持したまま再度うなずいた。

03-05行目の過程において、Xは「卵とじ?」という発話を通じて、注意が鍋からそれたAに再び共同注意を促し、次に作るメニューである「卵とじ」と鍋の存在を結びつけた。

事例①から明らかになるのは、ヘルパーと利用者との共同作業において、共同注意の達成は一回限りの出来事ではなく、指さしや発話を用いて、繰り返し達成し直されるプロセスであるという点である。この「共同注意の達成し直し」をさらに検討するために、次により長い事例を考察する。

2. オノマトペの活用が調理動作に与える影響

●事例②「カチャカチャやって」

- 06 X: じゃあ、卵ひとつでいいか
07 (0.5) ((Xが冷蔵庫から1つ卵を取り出す))
08 X: そしたら、これ
09 (1.0) ((Xが卵を左手に持ちかえる))
10 X: これさ、カチャカチャやってやって
11 (0.3) ((Xが右手でかき回す仕草をする))
12 X: これだ!
13 (0.5) ((Xが卵を割るお椀をAの目の前に手を伸ばして水切りかごから取る))
14 ((Aが、Xの手元を見る))
15 X: これで
16 (0.7) ((Xが卵をお椀に入れる))
17 X: カチャカチャやってやってさ ((Aがお椀の中の卵を取る))
18 X: 卵、溶いて ((Xがお椀に指を指しながら調理台に置く))
19 (1.6) ((Aが卵をシンクの縁でひびを入れる))
20 X: で、これに ((Xが卵とじを作っているお鍋を指す))
21 (0.3) ((Xがコンロに火をつける))
22 X: 入れてくれる? ((Aは卵を割る))
23 A: はいよ: : ↑
24 (0.4) ((Aが卵の殻をゴミ箱に捨てる))
25 X: はい。カチャカチャ ((Xが箸をAに渡す))
26 (0.7) ((Aが手を洗う))

- 27 A：はい、ちょっと待ってください、ちょっと待ってください(Aが手をタオルで拭く))
- 28 X：はい、はい((Xが菜箸をお椀の上に置き、鍋に入れる出汁を手に取る))
- 29 A：はいよ：((Aが菜箸を受け取る))
- 30 X：はいよ
- 31 (8.1)((Aが卵を溶く))((Xは鍋の様子をみている))
- 32 X：甘くしなくていい？((Xが鍋を指しながらAの顔をみる))
- 33 A：ん？↑
- 34 X：これ、卵とじにさあ((Xが鍋の中を指指しながら))
- 35 X：卵いれたら、甘くしなくてはけど、甘い方がいい？((XがAの顔をみる))
- 36 (0.3)((Aが卵をかき混ぜながら、指された鍋を確認する))
- 37 A：まあ、なんでもいい
- 38 X：ほんと？
- 39 ((Aが卵をかき混ぜ終わり、お椀の縁を菜箸でチンチンチーンと軽くたたく))
- (下線部分がオノマトベ)

事例②「カチャカチャやって」は、前述の事例①の続きであり、AがXに促されて、卵を椀に割り入れ、菜箸でかき混ぜる場面である。この場面でXはオノマトベを使用している。

オノマトベ(onomatopocia)とは、「ドンドン」などの擬音語、「ふわふわ」などの擬態語、そして「そわそわ」などの擬情語の総称するものであり、音声の特徴と語の意味に類似性(類像性)が見られる点が特徴である。また、日本語のオノマトベは、触感や動きなどをわかりやすく表現するために、様々な場面で使用される⁹⁾。

Xはコンロの前に立ち、Aはすぐ横のシンクの前に立っている。06－16行目で、Xは冷蔵庫から卵を取り出し(07行目)、「カチャカチャやって」という発話とともにかき混ぜる動作を行い(10－11行目)、続いて「これだ!」と言いながら利用者のそばにある椀を取り(12－13行目)、椀に卵を入れて差し出す(15－16行目)。Aが差

し出された椀の中から卵を取り出すと(17行目)、Xは調理台の上に椀を置く(18行目)。Aは卵を割ってその椀に入れ(19－23行目)、殻をゴミ箱に捨てる(24行目)。25行目でXは「はい。カチャカチャ」と言いながらAに菜箸を差し出す(図4)。Aは手を洗って拭いてから(26－27行目)、菜箸を受け取り(29行目)、卵を溶き始める(31－39行目)。

事例②で注目すべきは、「卵を割って溶いてください」といった具体的な指示を一度に与えるのではなく、「カチャカチャ」というオノマトベを10行目、17行目、25行目で繰り返し使用しながら、段階的にAが卵を溶くという作業へ誘導している点である。

10行目の「これさ、カチャカチャってやって」では、Xは左手で卵を持ちながら、右手でかき混ぜる動作を行っている。AはXの右手の動作に視線を向けているが、卵には注意を向けておらず、手は動かしていない。

12行目の「これだ!」では、XがAの前に手を伸ばして、卵を割るための椀を取る動作により、Aの視線は引き続きXの右手に向けられている。

Xは17行目で「カチャカチャってやってさ」と発話しながら、卵を入れた椀をAに差し出すが、Aは椀を受け取らず、中身の卵だけを受け取る。その後、18行目でXは椀をAのすぐそばの調理台に置きつつ、初めて「卵、溶いて…」と具体的な指示を与える。Aは19行目から23行目にかけて、シンクの縁で卵の殻にひびを入れ、示された



図4 事例②の25行目「はい。カチャカチャ」でAに菜箸を差し出すX

椀に卵を割り入れる。

Aが卵割りの一連の作業が終了した直後、25行目でXは「はい、カチャカチャ」と言いながら菜箸を差し出し、Aに卵を溶くように促す(図4)。Aは26-27行目でいったん椀を置き、手を洗うが、27行目で「はい。ちょっと待って下さい」と繰り返ししていることから、椀を置いた後も作業に対する意識が続いていることがわかる。Aは29行目で椀と菜箸を取り、31行目以降で卵を溶き始める。

以上のように、Xによるオノマトペは、Aに注意を喚起しつつ、卵を溶く作業への誘導を段階的に行う役割を果たしている。Aの注意は必ずしもXの意図する対象に向けられるわけではないが、Xは状況に応じて椀を置きなすなどの行動を通じ、注意対象を再構成して共同注意を修正している。さらに、Aも「はい、ちょっと待ってください」といった発話で自らの行動を調整しつつ、次の作業への意識を保っていることがわかる。

オノマトペが利用者の調理動作に与える影響についてさらに考察するため、次の事例を検討する。

●事例③「ポンポン・ボツボツ」

【Yヘルパー (14秒)】の場面

- 40 Y：これね：：((Yがナスの入ったビニールからナスを1本取り出す))
41 (0.94) ((Aがうなずく))
42 Y：焼く時は、いつも穴を開けるじゃないですか。破裂するから。
43 A：ポンポンポンポン？((Aが穴を開けるジェスチャーをする))
44 Y：そうそうそうそう、それやってくれる？
45 A：うん
46 Y：ありがとう

【Xヘルパー (11秒)】の場面

- 47 X：あ
48 (1.41) ((Xが冷蔵庫の中を確認している))
49 X：毎度のナスがありますね
50 (1.27) ((Aがヘルパーを見る))
51 A：なんでもいいよ
52 X：これでいい？((ナスをAに見せる))

- 53 A：うん
54 (0.26) ((Xがナスの袋をゴソゴソ触る))
55 X：ボツボツ穴開けやってもらっても…
56 (0.27) ((ナスを袋から1本出す))
57 A：はいよ、はいよいいよ
58 (0.68) ((Xがナスをテーブルの上に置く))
59 X：じゃあ
(下線部分がオノマトペ)

事例③「ポンポン・ボツボツ」は、それぞれのヘルパーが「利用者と一緒に手助けしながら行う調理」を実践している場面である。Aの好みはナスであるという情報が共有されており、両ヘルパーとも「焼きナス」を献立として考えていた。A本人は過去にキッチンで料理をしていた経験があるため、「焼きナスを作る＝ナスの表面に穴を開ける」という手順を覚えているのか、あるいはヘルパーがいつもその手順を頼んでいるかは不明である。しかし、43行目でA自身が「ポンポンポンポン？」というジェスチャーをしていることから、Aがこの手順を手続き記憶として理解している可能性がうかがえる。

一方、55行目ではXヘルパーが「ボツボツ穴開けやってもらっても」と発話し、その後フォークを渡した。これを受けてAがナスにフォークを刺しながら「ボツボツ、ボツボツ…」と発話し穴を開ける作業を行った。この場面において、焼きナスの調理では、破裂防止のためにナスの表面に爪楊枝や竹串などでブツブツと穴を開ける手順が一般的であるが、Xはフォークを用いるよう指示している。その際、ナスにフォークを刺す音を「ボツボツ」とオノマトペで表現している。この指示は非常に再現性が高く、視覚と聴覚を結びつけた効果的な表現となっている。

このように、介護現場ではオノマトペが円滑なコミュニケーションを促進するために多用される傾向がある。しかし、従来の日本語教育においてオノマトペはあまり扱われておらず(三上2006:49)、特に「ワンワン」で「犬」を表現するようなオノマトペの名詞的用法は、子ども向けのテキストや発話に多く見られるものの、フォーマル

な介護のテキストにはほとんど登場しない。しかし、本事例のように、「音や動作を再現する」という特性を持つオノマトペを活用することで、利用者への指示をよりわかりやすく伝えることができる場合がある。オノマトペが、具体的な指示を具現化する役割を果たし、認知症などにより注意の分散がみられる利用者に対して注意を喚起し、特定の対象に集中させ、それを維持させる効果がある可能性が示唆される。

3. 自立に繋げる意欲を引き出すケアの実践

●事例④ 利用者と調理台に並んで、一緒に調理し始めるまでの声かけ

【Xヘルパー①(68秒)】の場面

- 60 X：大根おろしもやってもらっていい？((Aに大根を渡す))
- 61 A：うんうん((ヘルパーが出してきた大根をみる))
- 62 X：これ、さっそく
- 63 A：どうするの？
- 64 X：ん？大根おろしだからね、おろしてもらうの
- 65 A：皮むいて…((テーブルの上に置かれた大根を見続ける))
- 66 X：う：：ん
- 67 ((Aがビニールに入っている大根を取り出す))
- 68 X：あったっけ？((引き出しから大根おろし器を出す))
- 69 X：あったあった、もう、すぐにみつけた((Aにおろし器を見せる))
- 70 A：そこ置いといてください
- 71 X：はい
- 72 (1.4)((大根おろし器を調理台の上に置く))
- 73 X：じゃあ、ここ置いときますね
(中略)(32秒)
- 74 X：これ、大根おろしをお願い((大根を指さす))
- 75 (0.7)((Aが机の上にあった大根とフォークを避ける仕草をする→おろし器をテーブルに置こうとする＝座ったまま大根おろしをするつमोरいよう))

- 76 X：これ、これこれ
- 77 (0.8)((XがAにおろし器を見せる))
- 78 A：はいよ
- 79 ((Xがテーブルに置こうとし、Aが手を伸ばして受け取ろうとする))
- 80 X：いい？ここ、置いとくよ((Xは調理台の方に置く))
- 81 A：うんうんうんうん
- 82 (0.4)((Aが大根を持ってヘルパーの動きを目で追う))
- 83 X：つけますよ
- 84 (0.3)(Xが換気扇をつける)
- 85 A：はいよ
- 86 (0.2)((立ち上がる))
- 87 A：おいしょ、おいしょ
- 88 X：よし
- 89 (1.2)((Aが立ち上がり、調理台へ向かう))

【Xヘルパー②(8秒)】の場面

- 90 X：じゃあ
- 91 (1.3)((サツマイモをXが自分で切ろうとするが、手を止める))
- 92 X：これさ、少しさ
- 93 (0.6)((Xがサツマイモを見ながら))
- 94 X：切ってくれる？これ
- 95 (0.4)((AがXの方を振り返る))
- 96 X：ちょっとさ
- 97 (2.2)((Aが立ち上がり、調理台へ向かう))
- 98 X：これ、これ
- 99 (0.4)((Aが見られるようにXがサツマイモの切ってほしい部分を指さす))

【Xヘルパー③(21秒)】の場面

- 100 X：そしたらさ
- 101 (0.4)((Xが手元のまな板のナスを見る))
- 102 X：ナス…
- 103 (0.5)((Xがゆっくり冷蔵庫の方へ振り返る))
- 104 X：ごはんがちょっとあるからごはん((Xが冷凍ごはんをみようと冷蔵庫に近づく))

105 (1.6) ((XがAの顔を見て、調理台のナスを
指さす)) ((Aもナスを見る))
106 X：ナス焼いてさ
107 (0.7) ((AがXの顔を見る))
108 X：あと、何しようか、ねえ ((XがAの顔
を見ながら話すとAがうなずく))
109 (0.9) ((冷凍庫からごはんを取り出す))
110 A：ナス、ナスはどんな風に切ればいいの？
((AがXに前のめりで聞く))
111 (0.9) ((Xが調理台のナスをみる))
112 X：こうさ、あの：：((XがAの顔をみなが
ら、調理台に近づく))
113 (0.7) ((Xが包丁で切るジェスチャーをす
る))
114 X：て…
115 (0.5) (Xがナスを持って3等分に切るジェス
チャーをする))
116 X：てんぷらっていうか、あの：：ただ油で
117 (0.3) ((Aが立ち上がり、調理台の方へ向か
う))
118 X：揚げる？

【Yヘルパー④(15秒)】

119 A：あと、私やるの、ない？ ((ダイニング
テーブルの椅子に座った状態で))
120 (0.39)
121 Y：もうちょっと待ってね ((コンロに向かっ
ている))
122 A：うん
123 (1.80) ((Aがヘルパーの動きをみている))
124 A：おいしょ
125 (1.99) ((Aが椅子に座りなおす))
126 Y：うーんと、ほうれん草を
127 (1.29) ((Yがほうれん草の入っている袋を手
に取る))
128 Y：炒めようとウィンナーと
129 (1.03) ((ほうれん草を1把取り出す))
130 A：うん
131 (0.25) ((AがYの方を見ている))
132 Y：じゃあ、自分が食べやすいように切っ
てくださる？

133 (2.41) ((Aが立ち上がり、調理台の方へ向か
う))
(下線部分は自立に繋がる意欲を引き出すケアと
して考えられる箇所)

事例④では、4つのケースを基に、自立に繋げ
る意欲を引き出すケアの具体的な実践を検討す
る。「利用者の自立の支援」に関しては、介護保険
制度においても、要介護状態となった者が「その
有する能力に応じ自立した日常生活を営むことが
できるよう」必要なサービスを提供することが規
定されており、単に身の回りの世話をするだけで
はなく、「高齢者の自立支援」を理念としている。

本事例のケースはいずれも、“利用者と一緒に
手助けしながら行う調理”を実施している場面で
あるが、どのケースにおいても利用者Aに対して、
無理に立ち上がらせて調理を手伝わせるような行
為は見られない。人の行為や行動は、動機から生
じた欲求と、それを満たそうとする意欲を前提と
して成り立っている。「一緒に調理をしましょう」
と誘っても、本人がその意味や目的を明確に理解
できなければ、行動に移すことは難しい。また、
いくら働きかけたとしても、コミュニケーション
過程で意味が伝わらなければ、動機づけとして機
能しない¹⁰⁾。

利用者Aが「立ち上がって調理台で調理をする」
という行動を取るためには、まず、座っている椅
子から立ち上がることに意味があると認識される
必要がある。つまり、Aの生活に即した「椅子か
ら立ち上がって調理をする意味」やその内容をヘル
パーが考え、A自身にその意味を理解してもら
う必要である。ケアを必要とする人には、その困
難な部分を支援しながら、生活の具体的な場面を
演出し、働きかけることが重要である。以下、こ
の支援の具体例を分析する。

61行目の「大根をおろす」という作業について、
Aは理解しているように見えるが、63－65行目
では欲求や意欲をほとんど示しておらず、行動に
移すことができていない。Aは認知症の症状があ
り、通常30秒程度の短期記憶しか保持できない
ことが知られている。68－69行目でXが大根お

ろし器を見せても、Aは70行目で「そこ置いといてください」と発話し、その場では作業を行う意思がない態度を示している。しかし、32秒程度経過した後、Aが大根おろしのことを忘れていた可能性を考慮し、74行目でXは再び大根を指さしながら「これ、大根おろしをお願い」と伝えている。

Aは75行目で立ち上がり、座ったまま大根おろしを行おうとしたように見える。このとき、ダイニングテーブルにおろし器を置くために、目の前の物を片付け始めている。77行目でXが再びおろし器を見せるが、それをテーブルには置かず、80行目では手を引きながら「いい?」と確認した後、調理台の上におろし器を置いた。Aは一瞬戸惑った様子を見せたが、Xが「いい?」と絶妙なタイミングで声をかけたことで、Aは82行目で手元の大根を手にとり、Xが換気扇を作動させる「ゴー」という音とともに、Aは「はいよ」「おいしょ、おいしょ」と言いながら大根を持って調理台に向かい、Xとともに調理を始めた。この事例は、利用者の意欲を引き出し、ヘルパーと一緒に調理台で調理をするという、非常に効果的な支援の例であると考えられる。

また、利用者が最初から料理をする意欲がある場合の【Xヘルパー②】【Xヘルパー③】【Yヘルパー④】のケースでは、94行目のXの「切ってくれる?これ」や、108行目の「あと、何しようか。ねえ」といった発言により、利用者の自己決定を促し、113行目で包丁のジェスチャーをしながらAの気持ちを維持しようとしている。また、132行目のYの「じゃあ、自分が食べやすいように切ってくださいな?」といった声をかけや身体表現を交えながら促し、利用者とともに、調理台に立つことを誘導する工夫が見られる。

どの場面においても、短時間の中で相手の注意が消えないうちに次の行為を繰り出し、利用者の意欲を引き出そうとしている。このように、高齢者の自立支援は、利用者が自ら行おうとする意欲を高めるための直接的・間接的な支援が重要であり、意欲が伴わない自立支援は「自立の強要」となりかねない。これらの点から、ヘルパーは、利

用者が自発的に行動する意欲を高める支援に重点を置いているといえる。

4.「待つ介護」のケア実践(53秒)

●事例⑤「今日は何にしましょうか」

134 Z:((Bさんの左側に正座で座る))今日は
何にしましょうかね

135 (0.80)((左手を上げる))

136 Z:タバコ、まだあります?

137 B:ひとつ、もらおうか

138 Z:はい、タバコ、はい

139 (1.32)((Zがメモする))

140 Z:今日、牛丼、牛丼かお寿司か…

141 (1.63)((Bが考える))

142 B:牛丼がいいよhh

143 Z:hhhhh((うなずきながら、笑う))

144 (0.55)((Zがメモに目をやりながら))

145 Z:牛丼にしましょうか、はい

146 (3.00)((Zがメモをする))

147 Z:あとはいつも通りで。あ、ぶどうは?
((Bの顔を見る))

148 B:ぶどう

149 Z:ぶどう、はい

150 (0.78)((Zがメモをする))

151 B:あと、あ、あれ、なんだっけな((Bの
声が聞こえた瞬間顔を見る))

152 (0.34)((じっとBさんの顔をみる))

153 B:梨、もらえる?

154 Z:梨、はいはい。わかりました、梨…

155 (0.23)メモをする

156 Z:いいですか?

157 (0.37)((Bの言いたいことを把握しようと、
より前のめりで話を聞く))

158 B:今日…((ZがBの顔を見ながら言葉を
じっと待つ))

159 B:なんだ、あの…((ZがBの顔を見なが
らグイグイっと前に動く))

160 B:くじら

161 Z:あ:↑、くじら、くじらね((姿勢を
戻しながら、メモをする))

162 B:はい

14秒

163 B：あとは、いいかな
164 Z：あとは何も…はい、わかりました((立ち上がってペンを置く))
165 B：すいません
166 Z：うん、いえいえ
(下線部分は待つ介護のケアとして考えられる箇所)

事例⑤「今日は何にしましょうか」は、あえて手や言葉を出さずに、利用者の自己決定を尊重し、自立支援に繋げている場面である。本事例では、ヘルパーが買い物にいく前に、利用者に購入する物を尋ねるやり取りである。

高齢者福祉の原則¹¹⁾には「自己決定」が含まれている。この理念は、ケースワークの領域では、F.P.バイステック(Biestek)が、「ケースワーク7つの原則」¹²⁾の一つとして定式化し、以降、支援者が依拠すべき原則として定着している。「自己決定の尊重」は、個人の望むライフスタイルを「自由」に実現するための積極的な決定を保障することを意味する。

Zヘルパーは週5回訪問し、ほぼ毎日同様のやり取りを行っているようである。特に、構音障害があり、言葉を出しづらい利用者Bに対して、時間をかけて丁寧に対応している。BがZに対して行動を起こそうとしたり、発話しようとした際、Zが静かに待ち続ける姿が印象的である。156行目から160行目までの14秒間もZはBが発言するのをただ待ち、Bが「くじら(ベーコン)」という言葉をやさしく発することができなかったときも、身を前に乗り出して聞く姿勢を示した。さらに前のめりになる動作を2度繰り返し、Bを促す姿勢を見せている。この動作により、Bは「ここで何かを言おう」という意欲を引き出されたと考えられる。

「くじら(ベーコン)」も普段からの定番の総菜であり、Zが「くじらですか?」と選択肢を提示することもできたはずである。しかし、Bが最近ST(言語療法士)による言語訓練を受けていた背景を踏まえ、ZはBの言葉の表出を促そうとしたと考えられる。そして160行目でBが「くじら」

と発言すると、161行目でZは「ああ～、くじら! くじらね」と明るくはっきりと確認し、前傾姿勢を元に戻す大きな身体表現を見せた。この行為により、Bは「わかってもらえた」「考えが伝わった」という安心感を得て、163行目で「あとは、いいかな」という言葉が表出したのではないかと考えられる。

自分の意志が尊重されず、他者に物事を決められてしまうと、人は無気力になり、時には抵抗することもある。一方で、人は自分で決めたことだからこそ頑張ろうと思ひ、「今日も生きよう」と意欲を持つ。このように、Zヘルパーは「待つ介護」を実践することで、利用者の意欲を引き出し、自己決定を尊重する支援を行い、自立支援に繋げていることが明らかになった。

5. ヘルパーを交えた振り返り

これらの一連の動作について、データセッションの場でヘルパーX氏とZ氏に同席してもらい、映像を観ながら分析を行った。

まず、指さしについてXは「相手に指示をしているつもりはないが、特に在宅の場面では物がごちゃごちゃしていることが多く、言葉よりも物を指したり、時には身体を近づけたりして伝えたほうがわかりやすい」と述べた。事例①においてXが指さしを行い、鍋の方に近づいていく場面では、最初から鍋を指さすだけでは利用者Aが混乱する可能性があるため、Xの指さしとそれに続く動作は、Aが複数の選択肢の中から鍋を選び取るために意図された行動であったことがわかった。

オノマトペの活用についても、Xは「積極的に使用するきっかけがあった」と説明した。Aが味噌汁を作る際、鍋肌を「コンコン」と菜箸で叩く癖があり、Xはその音に似せた「カチャカチャ」という表現を用いることで、より伝わりやすくなると考えていた。事例②の39行目でAが「チンチンチーン」と菜箸でお碗の縁を叩いた行動は、Aが作業中にリズムカルな音を感じ取っていたことを示す例といえる。

Xによる「カチャカチャ」や「ポツポツ」という表現の繰り返しは、偶発的なものではなく、Aの

日常に潜在している作業のリズムに「カチャカチャ」というリズムカルな言語表現を組み込むことで意図的に行われた結果である。このような創意工夫には、冒頭で述べた「家族や家庭それぞれの個別な価値観を捉え、その価値観に合わせた支援」が反映されている。

意欲を引き出すケアについて、Xは自らの言動を映像で繰り返し確認し、特に79行目と80行目で、Aへの確認が十分に行われていたかを再確認していた。Aも認知症の進行に伴い、注意力や動機づけの低下が見られ、座ったままで料理を作ろうとする受動的な姿勢を示していた。このため、XはAの自発的な調理への動機づけを考慮し、差し出したおろし器をタイミングよく素早く手を引くことで、Aの前傾姿勢を保ち、調理台への注意を引き戻した結果、Aが立ち上がる行動につながった可能性がある。この行動は、Aの自発的な行動を促すための工夫であり、意欲を引き出すケアの一環として重要である。

ヘルパーZは、介護において「声掛け」の重要性が強調される一方で、それが全てではないと考えていた。相手の行動を観察し、何が必要かを判断することが重要であり、それこそが相手のニーズに応えることだと述べていた。そのため、利用者が何かをしたいと感じたときには、あえて声を掛けずに自主性を促す工夫を行っていた。声を掛けることで、利用者が自発的に行動する機会を失う可能性があるため、「待つこと」の重要性を意識的に実践していたことがわかった。

また、Zは空間の「空気を乱すこと」の重要性についても言及していた。事例⑤のBとのやり取りの前、Zが掃除機で大きな音を立てて部屋を掃除する場面があった。一般的には、ヘルパーが行う生活援助としての掃除と考えられるが、これはBが一人暮らしで一日中家にいるという状況の空気を意図的に乱すための行動であった。Zは、利用者Bが一人暮らしで静かな空間にいと、変化のない環境が利用者をさらに受動的にさせる可能性があると考えていた。静かな空間では、利用者が「何もしなくても良い」と感じ、自発的な行動や意思表出が減少する恐れがある。その結果、利

用者の意欲や主体性を引き出す役割が果たせなくなる可能性がある。

Zは、このような状況を改善するために掃除機の音などで空間を動的に変え、新たな刺激を与える工夫を行っていた。静かな空間を動きのあるものにすることで、利用者が「話してみよう」「動いてみよう」と感じやすくなり、自然なコミュニケーションや行動を引き出すことができたと考えられる。このように、Zはあえて空間を変化させることで、利用者の主体性を促し、自立支援に繋げていることがわかった。

IV | 結論

本稿で取り上げたデータについて、データセッションの場にある実際のホームヘルパーに同席してもらい、映像を通して分析を確認した結果、初めて自らの行動が具体的に表れていることを認識する機会となった。

事例①～④から明らかになったのは、利用者Aが共同注意の対象への注意を維持することに困難を抱える一方で、ヘルパーXは複数のマルチモーダルな行動を組み合わせ、特定の発話をその都度異なる動作と結びつけることで、Aの注意を維持しようと試みている点である。Aもまた、注意を維持しようとする努力を行っており、この粘り強い共同注意の営みは、対人援助の場面を分析することで初めて可視化されたものである。今回は限られた事例を取り上げたが、今後は多様な共同注意の過程を分析し、その維持のあり方をさらに考察する必要がある。

また事例⑤では、ヘルパーZは、「声掛け」に依存せず、相手の行動を観察し、必要に応じて声を掛けずに待つことで自主性を促していることが示された。また、空間の「空気」を意図的に変化させることで、利用者との自然なコミュニケーションを促進し、相手の本音を引き出す環境を作る重要性も強調された。これらの手法が、利用者の自立と意欲を引き出す効果的なケアに繋がっていることがわかった。

さらにヘルパーを交えた振り返りにより、現場で行われている複雑な相互行為が、単なる偶発的

なものではなく、ホームヘルパーと利用者との来歴に由来するものであることが明らかになった。利用者ヘルパーの「協働の場」で展開される相互行為（インタラクション）では、ヘルパーが働きかけて文脈が立ち上げるのではなく、むしろ利用者の行為や発言を受けることで始まり、ヘルパーがそれに「受けて返す」という形で対応していくことが特徴である。

相互行為の中で時折発生する「スリップ」は、細馬¹³⁾によれば、利用者の行動や言葉が文脈から一時的に外れる現象を指す。このようなスリップは、コミュニケーションの断絶を招くのではなく、新たな行為や文脈を生み出すきっかけとなる場合がある。例えば、スリップが発生した場合でも、「あのね、Aさん？」と場面を戻すような声掛けや、じっと利用者の話を聞いていたヘルパーが159行目のように大きく前に出る動作により、文脈が再構築され、「受けて返す」というスキルを発揮している。このような対応は、相互行為を維持し、利用者との関係性を強化する上で重要な役割を果たしている。

ヘルパーたちはまず利用者の言動を受け止め、それにどう応答するかを理論や知識に基づいて判断し、関係性を築いている。細馬は「スリップ」について、「相手の注意を『粘り強く』維持しながら、相手の注意が消えないうちにコンマ秒単位のタイミングでさっと次の行為を繰り返す。そのことで、スリップは次の行為を生む手がかりへと変

わりながら、関係性を維持し続けている」(細馬2016:263)と述べている。このように、ヘルパーは声掛けやジェスチャー（指さし）、オノマトペ、空気の変化など、身体や道具を駆使して重層的な行為を行っている。

以上のことから、ヘルパーと利用者の相互行為は、非常にマルチモーダル（複数の異なる手段を組み合わせた）なインタラクション（相互行為）であることが示唆された。このようにケア実践を可視化し、分析を繰り返すことで、ケアを科学的に捉え、再現性のあるケアを実現するEvidence-based-Careの確立に繋がる。また、このプロセスは、ホームヘルパーの専門性の向上と確立に寄与するものと考えられる。

V | 謝辞

コロナ禍という厳しい状況の中、訪問自体が困難であるにもかかわらず、貴重なデータをご提供いただいたヘルパーの皆様、利用者の皆様、そのご家族の皆様、そして訪問介護事業所の管理者の皆様へ心より感謝申し上げます。皆様のご協力とご理解がなければ、本研究を進めることはできませんでした。

また、本研究の過程において、多大なご指導とご助言を賜りました早稲田大学文学学術院の細馬宏通教授、データセッションに参加してくださった早稲田大学大学院の細馬ゼミの皆様にも、深く御礼申し上げます。

〈注〉

- 1) 松本眞美, 2017,「研究動向から見るホームヘルパーの専門性に関する一考察」『関西福祉科学大学紀要第21号』: 47-59.
- 2) 須加美明, 1999,「ホームヘルプとソーシャルワークの共通性と固有性—ソーシャルワークとケアワークの共通基盤に向けて」『長野大学紀要21(1)』: 37-46.
- 3) Murray, L.L., 1999,「Review attention and aphasia Theory, research and clinical implications」『Aphasiology13(2)』: 91-111.
- 4) 中島紀恵子, 2003,「介護の原理性」『社会福祉士養成講座「介護概論」』中央法規出版: 34-35.
- 5) 齋藤暁子, 2015,『ホームヘルプサービスのリアリティ—高齢者とヘルパーそれぞれの視点から—』生活書院: 18.
- 6) 細馬宏通・菊池浩平, 2019,『ELAN入門—言語学・行動学からメディア研究まで』ひつじ書房: 2-8.
- 7) 高木智世・細田由利・森田笑, 2016,『会話分析の基礎』ひつじ書房: 41.
- 8) 高梨克也, 2019,「発散型ワークショップでの発言に伴う指さし—多重の行為から見た活動への志向—」『安井永子・杉浦秀行・高梨克也編「指さしと相互行為」』ひつじ書房: 191-217.
- 9) 三上京子, 2006,「日本語教育のための基本オノマトペの選定とその教材化」『ICU日本語教育研究3』: 49-63.

- 10) 八木裕子・大元誠司, 2009,「介護における自立支援」『介護福祉士養成講座1 人間の理解』中央法規出版: 61-62.
- 11) 1982年デンマークの福祉省「高齢者問題委員会」(委員長アナセン教授)において、「高齢者福祉の三原則」が定められている。高齢者福祉の三原則は「自己決定」「生活の継続性」「自己能力の活用」である。
- 12) F.P. バイステック (訳者尾崎新・福田俊子・原田和幸), 2006,『ケースワークの原則-援助関係を形成する技法-』誠信書房: 159.
- 13) 細馬宏通, 2016,『介護するからだ』医学書院: 242-263.

◎ 付 録 事例の文字化に用いた記号を以下に記す。

(数字) 音声途絶えている状態、数字は秒数を示す

:: 直前の音の引き伸ばし

h 呼気音

.h 吸気音

↑ ↓ 音調の極端な上がりと下がり

? 語尾の音調の上がり

(()) 動き

◎ 参考文献

F.P. バイステック (訳者尾崎新・福田俊子・原田和幸), 2006,『ケースワークの原則-援助関係を形成する技法-』誠信書房: 159.

細馬宏通, 2016,『介護するからだ』医学書院: 242-263.

細馬宏通・菊池浩平, 2019,『ELAN入門-言語学・行動学からメディア研究まで』ひつじ書房: 2-8.

三上京子, 2006,「日本語教育のための基本オノマトペの選定とその教材化」『ICU日本語教育研究3』: 49-63.

松本眞美, 2017,「研究動向から見るホームヘルパーの専門性に関する一考察」『関西福祉科学大学紀要第21号』: 47-59.

Murray, L.L., 1999,「Review attention and aphasia Theory, research and clinical implications」『Aphasiology13(2)』: 91-111.

中島紀恵子, 2003,「介護の原理性」『社会福祉士養成講座「介護概論」』中央法規出版: 34-35.

齋藤暁子, 2015,『ホームヘルプサービスのリアリティ-高齢者とヘルパーそれぞれの視点から-』生活書院: 18.

須加美明, 1999,「ホームヘルプとソーシャルワークの共通性と固有性-ソーシャルワークとケアワークの共通基盤に向けて」『長野大学紀要21(1)』: 37-46.

高木智世・細田由利・森田笑, 2016,『会話分析の基礎』ひつじ書房: 41.

高梨克也, 2019,「発散型ワークショップでの発言に伴う指さし-多重の行為から見た活動への志向-」『安井永子・杉浦秀行・高梨克也編「指さしと相互行為」』ひつじ書房: 191-217.

八木裕子・大元誠司, 2009,「介護における自立支援」『介護福祉士養成講座1 人間の理解』中央法規出版: 61-62.